
唯一絶対個体種俺

無問題

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唯一絶対個体種俺

【Nコード】

N2916P

【作者名】

無問題

【あらすじ】

特に何もすることのない魔王が執拗に現れるモブ勇者に苛々し、のんのんとした生活に飽き飽きし。
勇者成り替わり？経験済み。勇者仲間入り？経験済み。下界巡り？経験済み。魔界巡り？自領じゃん。ect……。。

それもこれも、魔〃悪設定が悪い！
俺達そんなに悪くない！

そつだ！魔物〃悪イメージ撤廃すればいいんでね？

日頃の鬱憤と持て余した暇を解消するため、魔王が魔王の肩書を前面に押し出し、全力で善行する話。

作者自己満チートand厨二乙作品。

そんな非王道

魔王がどうの、魔物がどうのといわれて幾ばくか。

勇者がどうの、英雄がどうのといわれてやはり同じく幾ばくか。

人間に、悪を押し付けられて幾ばくか。

【下界、勇者召喚なう。】

主に魔物の住むここ、魔界とも、主に人間の住む下界とも違う、所謂異世界から取り入れ、この世界風に改良した魔導式携帯電話。スライド式、またはタッチパネル式（iPhone式ともいう）が魔界の主流で、発案者な俺は両タイプを所持しているが、今手元にあるのはスライド式だ。

そして同じく異世界から取り入れたツイッターならぬ現事 うつつごと、略してうつごとに追加された新メッセを見、うんざりする。

「いい加減、面倒だ」

思わずばやいたところで、誰も俺を責めはしないだろう。

先週、先々週、一月前、半年前、一年前、一年一週前、二年前、二

年三日前。

それぞれ別の勇者が召喚、トーナメント、異世界トリップ等々、様々な仕立て上げられ、続々と俺を筆頭とした魔族、魔物と称されるモノを狙う。

いつの頃からだったかなど当に忘れたが、兎も角延々その繰り返しだ。

初期の勇者らはそこそこに骨があった。

力を持つことにより、争いを好む質の俺達も、当初はスリリングな戦ゴッコとして楽しんだものだ。

しかし、ゆとり某のおかげか知らないが、近頃の勇者とやらはとんと弱くなった。

それから変わり者が増えた。

テンプレ勇者は魔王だの何だのと俺を祭り上げる割にはここまでたどり着かない。

まず雑魚が倒せない。

終いには俺の部下の部下の部下くらいの一班长を魔王、つまり俺と勘違いする。

その癖、登場回数がやけに多い。

これらをあしらうのが面倒で面倒で仕方がない。

そして変わり者達。

召喚され、速攻で逃げ去り悠々自適に暮らす者。

適当な魔物を狩り勇者としての功績を作り上げ、姫巫女を嫁にしたり、皇子の嫁になったりで、真相は闇の中、な者。

同性に走り騎士や国主といちゃつく者。

魔王にジョブチェンする者。

国を乗っ取る者。

俺の元まで辿り着き、何故か忠実な僕となった者。

因みに余談だが、魔界には【召喚・トリップ被害者の会】なる会があり、勇者召喚、トリップにより死線を強いられた者、召喚された、トリップしたはいいが何の力も無く捨てられた者、魔王だと思われていた魔物を倒し、挙げ句脅威として処分された者等々異世界被害者が所属。

日々助け合い、愚痴り合い、平和な毎日を過ごしている。

とはいえ、ここに居着く勇者はほんの一部で、大半は俺が元の世界へ帰す。

だが、ここが気に入ったらしい勇者達は会合やら遊びに来たいやらと電話で俺を呼び出し、送迎係に命じて下さる。
人を何だと思っているのやら。

閑話休題。

大分筋がずれたが要は、またも勇者が現れた、ということだ。
洒落にならん。

魔物Ⅱ悪説払拭キャンペーン開始なう

【天馬：勇者、魔王討伐を決意。 m9（＾Д＾）プギヤーww】

【こがね：主様、心配には及びませぬ。この黄金、全力で事の解決に当たりましょうぞ。

天馬 コロス。】

【ムウベル：人間なんざ放つとけ。

天馬 削除。】

【天馬：こwwろwwさwwれwwるww】

「……」

続々と上げられるメッセ。

携帯画面を見つめ、顔文字と同じ顔をしているであろう天馬と、黒いオーラを発しているであろう二人を思い浮かべ、俺は沈黙した。携帯の存在する世界から来た勇者達はじめ、女子高生顔負けの携帯打スキルにイメージが、と呟いていた。などしようもない事を思い出す。

ついでに弁解しておこう。

黄金が己のハンドルネーム、というか本名を平仮名登録しているのはうつごと開始当初、彼が携帯初心者だったからに他ならない。決して彼が平仮名可愛い、などと思っただけではない。決して。

【魔王：勇者は暫く様子見だ。天馬に関しては程々に、としか言えん。】

【天馬：見捨てられたww】

【前鬼：m9（＾Д＾）】

【後鬼：m9（．．）】

パチン、と黒い携帯を閉じ、瞠目。
今回の勇者はどう出ることやら。

因みに先週の勇者は殉職した。

詳しく言えば俺TUEEEで調子づき、人間の組織した討伐ギルドとやらで上級クエを受諾。

敵のハイレベルが身の丈に合わず餌となった。

勇者なんぞ居過ぎて、既に興味の「き」の字すら消え去った俺はよく知らないが、癪に障る人間だと毎回率先して勇者観察に行く天馬がばやいていた覚えがある。

確かヒポグリフの如くプライドの高い高慢ちきな女、だったか。

何の因果かその高慢ちきを餌にしたのは、天馬いわく高慢ちきなヒポグリフ。

御愁傷様としか言えん。

さて、勇者に関しては今のところ天馬が監視している上、暫くは観察と指示を出したため俺にすることはない。

王、といっても俺と部下達の関係は国王と人民、ではなく契約主と使い魔。

全てが俺の使い魔だから、「王」と称されたのだろう。

人王とは違い、ただ他の者より強くあればいいだけな魔王業故、書

類に溺れる事も、部下にせつつかれることもない。

しかしやることもない。

俺がやる前に全て僕達が済ましてしまふ。

人王が忙殺されるというならば、魔王は暇殺されるのだろう。

「……」

いつそ己も勇者を名乗るか？

いやしかし、それは50年前に実行済みだ。

ならば勇者一行に加わってみるか？

しかしそれも三度実行済み。もう飽きた。

下界巡りは、一昨日してきたばかり。

魔界巡り……却下。

ギルドランクを極める、もした。

暇だ。暇だ。暇だ。暇だ。

どうしてこうも碌な事がないのか。

勇者が現れては消え、現れては消え、現れては消え。

無限ループって怖くね？と天馬も言っていた。

俺も今現在、進行形でそう思う。終わりのない耐久動画を見ているようだ。

それもこれも、人間が魔族を敵視するせいだ。

確かに人肉を喰う奴だっているが、だからと言って全部が全部じゃ

ない。

吸血鬼は貧血を起こさない程度に吸血を抑える。

第一近頃の人間は不味い為進んで吸血する輩などほとんどいない。龍とて手を出さねば大人しいものだ。

その他諸々の魔物達も、己の領域を侵されなければ必要に牙を剥くような真似などしない。

そもそも魔物の住む領域を散々に荒らしたのは奴らの方。

「……そうか。それがいい」

つらつらと考えていれば名案が浮かんだ。

これならば今まで一度もやったことはないし、いい具合に長期戦となりそうだ。

早速閉じていた携帯を開き、うつごとに書きこむ。

【魔王：魔物Ⅱ悪イメージ払拭キャンペーン開始なう。下界へ降りる】

世界どころか、あちらこちらの異世界でも上がった驚愕の声をスルーし、三対の黒い翼を広げた。

生きてます。死んでません。

w k t kするあまり翼を広げてしまったが、下界に降りるのに特に翼は必要ない。

しかし、一度広げてしまったものをすぐごと仕舞うのもどうかと思うので、そのまま翼で下界へ降りる事にする。

気分は失樂園。

いや、墜落はしていないから御降臨か？

しかし降臨するのに黒い翼はな。

白い翼にすればよかったか。

いやしかし、それでは魔王のイメージが。

特に焦る必要も無い為ゆるゆると降下しているせいか、思考がバンバンずれていく。

そろそろ軌道修正せねば。

さて、我ら魔物、魔族のイメージ撤廃の為にはまず、俺が魔王であることを包み隠さず前面に押し出し、その上で善行に励むのが一番いいだろう。

人間は魔王〃諸悪の根源が善行、のようなギャップ萌えに弱い。とすっかり異世界のオタク文化に魅了された天馬が言っていた。

あれでも奴は神馬、スレイプニルなんだがな。

非常に残念なキャラ変だ。

ところで萌えってなんだ。

ここで一つ問題が発生した。

別に俺が墜落死したとか、忘れ物したとかではない。

善行をする方法は大きく二つ。

蔓延る悪をLED蛍光灯っぽい光の剣で削除するか、何事かに苦勞する者の手助けをするかだ。

しかし、今俺の目の前に何かに苦悩している者は見られない。

それどころか現地点森だ。

久々の下界行きに目測を誤ったらしい。

たった一人分だが、人間の気配が確かにしたんだがな。

上空から見ているが、ここは森の奥の奥。

そのようなところにいる人間が困っていない訳がないと踏んだのだが。

人影すら見当たらないとは。

「む」

また、人の気配。

ちらり、ちらりとその存在が揺らぎ、霞み、現れるように、曖昧で、途切れ途切れで、おぼろげな。

これは、トリップか？

ちらつく気配といえば、トリップが消えかけの靈魂くらいなもの。

昔は転移魔法、なんてモノもあったが、今の人間にとっては手の届かぬ高等魔法だ。

かなりの魔力を要するし、そうホイホイとは使えまい。

それに転移魔法なら人体より先に魔力が現れる。

よってこれは除外。

いつまでも霞んだ気配がゆらゆらぐらぐらしているのもうっとおしい。

……よし。引きずり出そう。

どうせ今放置しようと後々には保護するだろうしな。

やり方は簡単。

- 1、空間と空間の間に手を突っ込む。
- 2、その辺を移動中な人間を掴む。
- 3、引きずり出す。

「うお!？」

開いたマールブル空間から、奇声と共に人間が出てきた。
黒髪、学生服（詰襟）、シオルダーバッグ。男。
とりあえず第一印象は黒い。

「うつ……！ぐええええ！」

「む」

引きずり出し、人間の体がこの世界の重力に従うと共にもがき始めた。

これが俗に言う蛙の潰れたような声というやつだ。

「し、ぬっ！マジ、で！死ぬっ！離し…はなせっ！」

失念していた。

人間は首にある器官を圧迫すると呼吸ができなくなる。
深い森を見渡せる高度に滞空し、人間の襟を掴んでいる今の状況で

は、確実に軌道は締まるだろう。
このままでは死ぬか。

脳に酸素が行かねば人は数分で死ぬらしい。

「っ!？」

文字通り、離れた。

「ぎゃあああああああ!」
「あ」

しまった。またも失念していた。
俺の身の回りには人間がほほいない。

飛んで当たり前の魔族、魔物たちばかりだ。

その上被害者の会の面々は生き残りの為魔法の腕を磨くからな。
奴らも大半が飛ぶ。

中には元から飛行可能な者もいる。

しかし、こちらへ来たばかりの人間の大半は、魔法だの何だのといった特殊能力を備えていない。

備えていたとして、使い方を知らない。

要は、落ちる。

一直線に落ちて逝った人間。

樹の枝をバキバキとその身でへし折りつつ、わずかながらに失速し、
なおも落ちる。

あの人間からは初代勇者軍程の魔力を感じた。

だからまあ、あの程度の墜落では死にはせんだろう。

俺の手のうちから逃れようとものがく力も、人間のそれではなかった。

おそらく肉体強化もかかっている。

普通なら死んだだろうが、今なら軽い全身打撲で済みそうだ。

グロいことにはならんだろうが、痛そうは痛そうなので落ちる寸前に目を閉じた。

どすんという、鈍い音。

下がコンクリでなくて良かったではないか。人間。

「いつつゝゝ！……て、は……？いき、て、る……？」

それだけはこの世界に感謝するといい。

いや、そもそもの原因はこの世界なのだが。

落下少年 時は駆けません

少年視點

今日も今日とて何ら問題なく笑顔で帰ろうしたはずだ。

俺に打撃を与えたテストは胸の内に仕舞って、漫画でも読もうとス
キップしていた、はず。

だのに次の瞬間、目の前が霞んで、歪んで。道が、空が、人が、車が、家が遠くなった。

「うおっ！？」

何だこれ、なんて意味もわからずパニくつてたら、後ろから何かに襟首掴まれて後ろに引つ張られる。

碌な抵抗もできねえ、なんて思ったら今まで安定してたはずの体が急に重くなって、下に落ちた。

かと思えば俺を引っ張ったそのせいで首が締まる！

「うっ……！ぐえええええ！」

死ぬっ！何これ！死ぬっ！

意味わかんねえよ！俺は将来美人な嫁さんとヨボヨボになるまで生きて死ぬって決めてんだぞおい！

「む」

む、じゃねええええええええええ！

何能天氣に人様の首絞めてやがんだおい！
空氣嫁やああああ！

「し、ぬっ！マジ、で！死ぬっ！離し…はなせっ！」

俺をぬつ殺そうとするそいつは意外素直に俺を離した。
で、俺は気付く訳だ。

超、たっけえのな。ココ。

ヤバいこれ。マジ高いわ。
アレだ。テレビのレポートで森全体映すへり並みに高い。
実際どれくらいの高さなんか知らんがな！

ふっざけんなちくしょー！

確かに離せと言った僕も悪うござんしたよ！
だからって落とすことねえだろ！

離せとは言ったが落とせとは言ってねえんだよばけえええ！

「ぎゃあ ああああああ！」

無駄な事つらつら考えてる間にも落ちる落ちる落ちる。
アイキヤンフライでも猫型ロボットでもいい！
ヘルプ！ヘルプミーーー！！

「あ」

あ、じゃねええええええええ！
末代まで崇つてやるううう！

地面が、地面が、地面が迫って！

こんなのテレビでしか見ねえと思ってましたっ！

バンジーすらする奴の気が知れん、俺は死んでもやらんぞとか思ってたのによぉ！

なんだこの仕打ち！耳元で風が轟々なっただけど！

体勢整える事すら初心者には不可ですよ！

初バンジーがこれかよ！

ふざけんなっ！

神よ俺が何をした！

こえええええええ！

嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！！

死にたくないっ！

「いゝっ！だっ！いゝいゝっ！！」

落下速度もそのままに俺に追い打ちをかける枝、枝、幹！

S Mバラ鞭で叩かれた方がまだマシだ！

いや、嫌だけど！

1 m先に地面が見えた。

ふっと意識が遠のく。

ああ、俺、死ぬのか……。

鈍い音が体中から響いた気がする。

何の音だ……？

それから、体中痛くなって……。

痛くな……って！？

「いつつ……！！……て、は……？いき、て、る……？」

全身の痛みにはつちり目が覚めた。

がばっと体を起こせば、血の海。わお

え、何これ。俺ってば出血多量？

死ぬの？死ぬの？

助かったと思ったら死ぬの？

どうしようもなく情報処理が追いつかない。

何で生きてる？とか、どうしてこうなった、とか、これ何の血、とか。

茫然と血の海を眺めていたら、ふと、影が差す。

「見事に顔から落ちたな。人間。酷い鼻血だ」

そう言っただけ俺の前に現れたのはさっき俺を落としたらしい声の主。

「……あ……？」

俺を無表情で見下ろす男は、何というか、俺の目から見ても素直に

美しいと言える。

美しい、けどこう、女性的でなく、男性的な逞しさというか、男前。日の光を背に三対の翼を広げ、ゆるりと俺の前に舞い降りるその姿があまりにも神々しくて、思わず息を忘れた。

「人間」

天使……じゃあねえな。絶対。

金髪どころか黒髪。目は血のような紅。

生えてる羽だって形は天使のだけど闇のように深く黒い。

「人間」

つか、総じて厨二っぽいのに面もスタイルもいいせいで寧ろ自然体というかマッチしてて非常にむかつく。

何だお前。

魔王降臨ってか。

様になりすぎてて笑えねえよ。

「人間、呆けるのはいいが、止血したらどうだ」

「おお！？」

忘れてた。すっかり忘れてた。

そっぴゃ俺、血いダラダラ何だっけか。

我にかえればさっきよりはだいぶ治まったものの、鼻からは未だに血が。

やっべ。服血だらけじゃねえか。

落下少年 時は駆けません（後書き）

落下少年、異様に精神安定してます。

作者自身に落下経験がないため、こればかりはどうしようもなく。

目を瞑っていただけると幸いです。

よくよく考えれば強敵

つい先ほどまで鼻血を垂らしたまま間抜け面を晒していた人間。服がどうのと言いながら鼻を抓むが時すでに遅し。

服は血だらけ。

その上血の香を嗅ぎつけた獣も集まってきた。

人が魔獣とか魔物と呼ぶ、魔力を持った獣型の生き物。

ただの獣より身体能力が高いだけのものや、魔法を使うものなど、その種は様々だ。

どろり、どろりと粘菌のようにその身を引き摺り、現れる白濁のそれ。

スライムと呼ばれるただ喰い、繁殖するしか能のない流動物だ。

「……羽の時点で気付けよ俺。ファンタジー。ファンタジーだ。つか、スライムとか、テンプレすぎだろ」

俺の後ろで奴らを引き付けた餌が余裕で呟いている。
この調子では、俺がいなければ死んでいたな。コイツ。

「人間。死にたくなくば動くな」

「は？死ぬ？や、だってソイツスライムじゃ……」

わらわらと湧く1m弱程のスライム。

その後ろから、木々の間に姿の隠れていた5mほどの親玉が現れた。

「いいか、スライムとは、流動体ゆえに生半可な攻撃が効かず、体

のほぼ全てを構成している水分が蒸発しきるまで、延々熱せねばならない生き物だ」

親玉の体内には、消化され、骨を曝した幾人かの人間。溶けかけたその装備から、戦士、もしくは冒険者であると推察できる。

「大した力を持たぬ人間には厳しかろう」
「うっ……ぐっ……」

吐いた。

どうやらこの人間にとって、スライムに沈むあの血肉はかなりの衝撃だったらしい。

他の勇者も、血を見ては吐き、他を斬つては吐いていた。精神を病み、気が狂った者、自害した者も多い。ここを訪れさえしなければ、のうのうと生きていられたものを。

胃酸の香が辺りへ広がる。

吐けるうちに吐いておいたほうがいい。

そう言い笑った勇者は誰だったか。

結果だけ述べよう。
わらわらと湧いた仔スライムも、数人を喰らった親スライムも、皆蒸発し、死んだ。

魔力量の極端に少ない人間ならばいざ知らず、「魔」の世界に住み、常に「魔」と共にある俺に底はない。

人間のように魔力切れの心配などせず、焼却し終了。

からからに干乾び、10cmほどに凝固した白い塊のようなスライムの死骸、そしてあえて焼却せずに残しておいた、溶けかけの遺品があちらこちらに散らばった。

「……」

乾ききった鼻血をこびりつかせ、吐瀉物で口の周りをドロドロにした、酷い顔の人間。

現実を忘れたように、虚ろな眼をしていた。

「顔を洗え。人間」

魔法で水のたつぷり注がれた水桶と、乾いたタオルを出してやる。

「……」

しかし人間はぼんやりと水面に映る己の顔を見るばかり。

いつまでもこの世を夢んでいそうな人間に焦れる。

服装から推察するに、この人間のいた世界では、このような光景など、映画やあつて御伽話にある架空のものでしかなかっただろう。

だからといって、いつまで現実逃避をしていたところで、現実が現実。

いい加減受け止める。

それを待つほど世界は優しくできていない。

血の香は未だ辺りに広がり、獣を呼ぶ。

呆けていても死ぬただだ。

「っ！？」

要はいい加減うつとおしい。

さくさく移動し魔物Ⅱ悪説払拭キャンペーンを遂行したい。
というわけで手早く水桶に人間の頭を突っ込んでみた。

顔は洗えるし、正気に戻るし、一石二鳥だ。

「えほっ！げほっ！げほっ！なにしゃがぶっ！」

「拭け」

顔面にタオルを叩きつければ人間は沈黙した。

大人しくノロノロと濡れた顔を拭う。

「……ありがとう」

タオルを下し、俯いた人間が呟いたのが聞こえた。

よくよく考えれば強敵（後書き）

謎のシリアスもどき。

その場のノリとテンションだけで進めてますんで、ね。

後々物語の矛盾に苦しむことになりそうです。

魔法とは魔術とは

「生きるなら来い」

人間がタオルでしつかりと顔の汚物を拭い、ついでに新しく入れ替えた水で制服の血を粗方落としたのを確認し、草を踏む。

木々が生い茂る中翼で飛ぶなど、寧ろ翼が引つ掛かって邪魔臭いの
で徒歩で進む。

翼は当に収納済みだ。

少し歩めば後方から人間が追って来た。

「なあ、アンタ、誰なわけ？で、ここ何処？それからさっきの可愛
げの欠片もないハイパースライムキング何。さっきの火は魔法でお
k？てか、なんで俺ここに居んの。帰れるわけ？これからどうし
よ
う」

どうやら吹っ切れた、というより、傷心の人間に対する俺の無体
にとりあえず頭を切り替えたらしい。

人間は俺を相手に情報の搾取を始める。

俗にこれを質問攻めというのだろう。

「一つ、俺は魔王だ」

「は！？」

「二つ、ここは俗に胃世界と」

「いやいやいや、ちよつと待てい！何さらつと流してんだよ！なん
だその重要ポジ！さらつと爆弾投下すんなよ！」

人が親切に答えてやろうとすれば、台詞を遮る。

「魔王ってアレだろ！？世界は俺様のものだ！蠅共よ！ひれ伏せい！ってやつだろ！」

「……随分と頭の悪い魔王だな。」

「いや、だって、魔王じゃん。王道的悪役じゃん。そんなどん引いた目で見んといて」

「魔王像など人の妄言だろう」

「そうですけども」

人間に溜息を吐かれた。

寧ろ溜息を吐くべきは、勝手に妙なレッテルを貼り付けられた俺だと思っのだがどうだろうか。

「あー、えっと、魔王、魔王な。アンタ、マジで魔王なわけ？」

「マジで魔王だ」

「……真顔でマジとか言うなよ……」

キャラにあってねえと言われた。

そんなものは知らん。

「なんでその魔王様がここにいらっしゃるの？」

「他の質問はいいのか」

「こつちのが気になるんで、先にこつちの回答をお願いします、魔王様」

「魔物」悪方程式払拭の為、魔王という肩書の元、一日一善を」

「アンタマジで魔王？」

「しつこいぞ人間」

また遮られた。

さくさくと草を踏む音が心地良い。

「じゃあ、魔王って何」

「人間の妄言に登場する、魔界の主、悪の化身」

「いや、そっちでなく、アンタのことだって」

「魔族」

「アッバウト」

「魔王に当て嵌められた魔族」

「アリガトウゴザイマス」

「構わん」

人間が溜息と共に頂垂れた。

溜息を吐くべきは俺だというに。

ボケキャラがどうのと言っているがそれは俺のことか？

それならばよく僕達にも言われる。

そんなつもりはないのだがな。

「次の回答に移るぞ。ここはお前の居た世とは別の世。つまりは異世界。弱小国イルラド南端部、果ての森だ」

「異世界……イルラド……果ての森……ですよねー」

「何がだ」

「やっぱ異世界ですよねーって」

「そうだ」

何を今さら。

俺の翼もあのスライムも魔法も見たらうに。

「次は先のスライムについてだ」

「お願いします」

「アレは魔物、魔獣という。要は魔力を持った獣だ。人により魔力を持ち、なおかつ獣の姿をしたモノを魔獣、先のスライムのような獣とは言い難いモノ、植物型等を魔物、俺のように人の姿を持つモ

ノを魔族とする者、魔に関するモノ全てを総称し魔物とする者、魔族を人型、他を魔獣、または魔物とする者など、そのあたりは大分曖昧だが、人間の間では最後の説が一般的だ」

「アンタらの間では？」

「さして拘りはない。悪魔、吸血鬼、龍、妖精等の種別意識がある程度だ」

「へえ」

種別意識がある程度、とはいえ、多種族を悪魔と一括りにしている悪魔種や龍種、妖精種等には、悪魔種インキュバスやら、龍種ワイバーン、妖精種コロポックル等、更に細かい区切りがあるのだが、まあそこまで詳しい説明は必要ないだろう。

「えーと、あと俺何聞いたっけ？」

「魔法、この世に居る理由、帰還手段、これ以降の動向についてだ」

「よく覚えてんね」

「人とはつくりが違うのでな」

「自慢か」

「事実だ」

どうにも抜けた会話が続く。

僕らと話しているようだ。

この調子であればおそらく僕らとも、被害者の会会員とも気が合うだろう。

先は安泰だな。

「人間では魔法の原理についての情報は処理しきれないので割愛するが、要はお前の世界にあるRPGと同じだと思えばいい。個々に宿る魔力を対価に発火等、対価に見合った現象を起こす。魔力が尽きれば魔法は使えん。生命力を莫大な魔力に変換し、魔法を行使する

ことも可能だが、それをすれば死ぬ。逆にいえばそれさえせねば魔力が尽きようが死ぬことはない。倦怠感はあるがな」

そこまで述べ、人間が首を傾げる。

「火をおこす、水を生む、の違いはどうやんの？」

「起こしたい現象に沿い、原理を構築すればいい。要はイメージだ」

「じゃあ、原理の情報が処理できない俺には残念ながら使えないってわけか」

後頭部で腕を組み、少々不満そうな顔をする人間。

やはり魔法という概念がありながら魔法が使えない世界の人間というものは、一度でいいから魔法を使いたいと願うものらしいな。

幾人かの勇者もこの人間と同じ反応を示していた。

となれば、こののちの反応も等しいものだろう。

「我らは本能により原理を理解し、魔法を行使する。その脅威に対抗するため人がとった手段は一つ。自らが魔法を使うことだ」

「でもさつき使えないつつたじゃん」

「魔法はな。しかし何か術があるはずと、人は我らを捕え、研究し、情報を集めた。惨いものだったぞ。そしてついに人間は我らの手により詠唱という手段を得た。原理の一部を言の葉により構成し、魔法に近い術を行使する。原理の一部のみを抜擢し構成するこれは、魔法に比べ相当の魔力を要するうえ、燃費も悪い。しかしそれでも人間にとっては大きな武器となった。それが魔術だ」

「……素直に喜べない言葉がちらほらあったんだが」

魔法ではないが、魔法に近い魔術が使えるとわかったというに、どうにも納得のいかない顔の人間。

やはり他の勇者と同じ反応だ。

確かに魔族の中にもこれが原因で人間を毛嫌いするものは多い。
黄金はその代表だ。

しかし、俺は多くの魔族が犠牲になったからこそ、この術を無下に
してほしくないと思う。

「魔術を戦の道具に使われるのは俺も好かん。しかし、人が何かを
守るための術になるのなら、死した者達も浮かばれよう。使う、使
わないはお前の自由だが、彼らの命を無下にすることはしないでく
れ」

「……ああ。分かった」

使う、使わないにせよ、この人間は魔術を無下にはしないだろう。
この顔は、あの勇者達と同じ顔だ。

魔法とは魔術とは（後書き）

未だ僕数人の名前しか出ていません。
何ということでしょう。

少なくとも少年の名前を出してやらなくては……！

そして続く謎のシリアスもどき。

何処へ向かっているのですか魔王様。

ふと思ったのですが、前話に関して、残酷描写警告は必要でしょうか？

作者としては微妙なラインだと思うのですが。
不快に思われた場合はご一報ください。

さて、問題です

残る回答はこの世に居る理由、帰還手段、これ以降の動向についていちいち説明するのも面倒になってきているが、これも一日一善だところえて口を開く。

「さて、この世にいる理由だが、今までの会話からでも十分推察できるだろう」

「召喚とか、トリップとかいうやつデスネ」

「そうだ」

「俺、なんかしなきゃならんわけ？」

「いや。お前は人知れず渡ってきたタイプだ。特に何をする必要もない」

「マジで？」

「マジだ」

この人間とは別に召喚された例の勇者とやらには、魔王討伐の任が課せられたようだが、こいつは違う。

よくあるトリップ物語的には、元の世界に戻るための手段を探す旅に出、ごたごたに巻き込まれるパターンだろうが、ごたごたに巻き込まれるどころか、物語開始から帰還手段、つまりは俺に出会っている。

なんとも運のいい奴だ。

「これ以降の動向と、帰還手段だが、これはまとめて話すぞ」
「おうさ」

やはり帰還手段となると、少々不安があるのだろう。
今まで緩んでいた顔に緊張が走る。

どうせすぐ解れる事になるんだろうが。

「まず、この世界にはお前のような迷い子や、テンプレ勇者召喚によりこちらの世界に来る者が非常に多い」

「多いんだ」

「腹立たしいほどにな」

「ははは。サーセン」

言えば人間は引き攣ったように笑った。

「そのような類の人間は世界渡りに耐えるほどだ。中々に能力値の高い人間が殆どでな。まず、勇者に祭り上げられる」

「ふむふむ」

「後に帰還させるとの約束の元、利用されるだけ利用され、処分されかけたり、勝手に呼びつけられ勇者としての責を押しつけられ、自力で逃亡する者等、勇者も色々だ」

「苦労してんのな」

お前もその一人になるはずだったんだがな、と口に出さず思う。つくづく運のいい奴。

「しかし実際この世界にある魔術は、他所の世界の人間をこちらに引き摺り込むものだけ。初めて召喚が行われた時、国は勇者をこの世界に拘束し、国同士の対戦や、我らのとの戦に利用する事を考え、こちらから他所へ行く術をあえて生みださなかった。して、国同士の大戦を勇者を使い制した後、今度は欲をかいって勇者の居た世界をも支配しようと試みた」

「ちょ、嫌な予感かしねえ」

あながち間違いではないが、案ずるほどの予感ではないぞ。人間。

とはあえて言わない。面白いからな。

「が、国や魔物との熾烈な争いにより、優秀な魔術師らは次々に命を落とし、気付けば世界渡りなどという高度な技に関する知識、技量は潰えていた。というわけで、こちらからあちらへ渡る魔術は存在しない」

「マジかー。うーわー。マジかー」

やはり相当にショックだったらしい。

唐突に歩みを止め、頭を抱えてその場に座り込んだ。

よく俺の言葉を咀嚼すればすぐ気付くはずなんだがな。

「まあ聞け」

「うい」

項垂れたまま、短く返事を返す人間。

魔術は、と言ったろうに。

「初めに言った勇者や迷い子達は当然路頭に迷い、元の世へ戻る為の道を模索する」

「そりゃそーだわな」

「そして俺か俺の僕に出会う。こちらの世界へ来た者を率先して観察したがる僕がいるから、大抵は僕の方と出会うな」

「で？」

「魔界を訪れ、【召喚・トリップ被害者の会】の存在を知り、意気投合。即入会」

「同じ被害者同士だしな」

「元の世界に帰って、またちよくちよくこの世界に遊びに来たり、ここに留まったり」

「へえ……はっ!？」

緊張が解れるどころか目が点になった。

こういうのを鳩が豆鉄砲をとか何とかいうのか。

効果音がリアルに聞こえそうなほどの勢いでこちらを見る人間。

「いやいやいや、今アンタ、帰れないって!」

「帰れないとは言っていない。魔術による帰還の術が無いとは言ったがな」

思わず人の悪い笑みを浮かべる。

他者をからかうのは誰だって愉快なものだろう?

「帰還手段は俺だ」

「……one more please」

「帰還手段は俺だ」

「マジで?」

「しつこい」

はあああああ、と大仰な溜息を吐いてもう一度顔を手で覆った人間。

俗にジト目と呼ばれる目つきで見られた。

「性質わりい説明の仕方すんじゃないやねえよ……。色々覚悟したつてえのに」

「しかし結果オーライだろう?」

「だとしても心臓に悪いんです。寿命縮まるんです」

「なに、死にはせん」

「性悪っ!」

もう一度不敵な笑みを向けてやると、今まで俺を睨んでいた人間が、

諦めたように溜息を吐いた。

「くっそ。真面目な面つつつか、無表情でさらりとからかいやがつて。兎に角、俺は元の世界に帰れると？そういうわけか？」

「ああ、いつでも好きな時に帰してやろう」

「あーでも、そう言われると、なあ……」

何やら複雑そうな顔。

「ちょっと異世界観光とか期待してたんだけど……」

「何、今すぐ帰れとは言わん。被害者の会と交流を持つもよし、世界を廻るもよし。今すぐ帰って時間のある時にここへ来るもよし」

「サービスイいのな」

「初回のみ限り、ここへ来る直前の時間に帰してやることにしているから、時間のことは気にするな。とはいえ、この世界で自身が成長することを忘れるなよ」

「魔王陛下！万歳！」

諸手を挙げ、俺をヨイシヨする人間。

「して、どうする？」

「なら——」

さて、問題です（後書き）

次回こそ、次回こそ少年の名を明かさねば……！

そして今回の魔王様はなぜか意地悪でした。
どうしてこうなった。

魔王様といっしょ

「なら俺、アンタについてっていい？」

これが人間の判断らしい。

魔王が単品で辺りを徘徊するより、傍に人間がいた方が何かと都合がいいというメリットが俺にはある。

しかし人間にとって、それはデメリットにかなり得ない。

「俺は目的の為、必ず厄介事に首を突っ込む事、また、魔王と共にいる事により、迫害の対象になる事。以上二点により、人間、お前が死に至る可能性が非常に高い」

力の元こそ備わっているものの、扱い方を知らなければ宝の持ち腐れ。

つまりは無力。

無力な人間に死を免れる術はない。

「それでも魔王についてくるか」

「行かないなら行かないで野垂れ死ぬだけだしな」

人間は頷いた。

半端な台詞だが、本人が良いと言うのなら俺に否やは無い。
嫌になれば離れていくだろう。

「てかさ、ずっと気になってたんだけど、人間てのやめない？俺にはちゃんと遠野修一って名前があんだけど」

「今まで名乗らなかつたのはお前だろう。まあいい。しかとつて来い。にんげ……修一」

人間、と言いかけ、名に言い換えると、人間、基修一は満足そうに頷いた。

「モチそのつもり。で、アンタ、名前は？」

「人間の持つ個体名は無い。魔王とでも呼べ」

「名前が無い？何で？」

これも勇者に必ず聞かれる質問の一つ。

何故、と尋ねられても人間と魔物の考えの違いとしか言いようがないんだがな。

「個体数のある者は名を名乗り個を区別するが、人間に魔王と呼ばれる存在は俺一人。個体名を持つ必要はないだろう」

もしくは魔王が名だ。

そう付け加えると修一は興味深そうな顔をする。

「魔王様はかなりの合理主義ですのね。いや、これ合理主義か？」

「文化の違いだ」

「魔王が文化とか……。俺のファンタジー像が音を立てて崩れていく……。もはや近所の堅物兄ちゃんじゃねえか！」

「五月蠅い」

「別にそこまで夢見てたわけじゃねえけど、複雑……」

何やら人間、でない、修一がぼやいているが、それこそ俺には関係

無い。

それでも人間らのイメージに合わせ、それっぽく髪、翼色を黒、瞳を赤にしているのだから、感謝してほしい。

「森を抜けるぞ」

「あ？いつの間に？」

「会話の合間に」

「ソウデスネー」

どうやら長時間会話に集中していたらしい。いつの間にやら森の終わりに近づいていた。森の空気に外の空気がゆるりと交わっている。

森を出た。

閑寂に吞まれるような、どこか心地好い空気がさつと身を離れる。

「おー。爽快」

木々で遮られていた視界が開けるのは確かに解放感がある。

コンクリートジャングルとまで称されるビル群の中で過ごしてきたであろう修一にとってはなおのこと。大きく伸びをし、息を吸っている。

「お前一人手助けしたところで何にもならん。集落へ向かう」

「何にもって……。いや、まあ、そうなんだけどさあ」

項垂れる修一に首を傾げた。

魔王様といっしょ（後書き）

素人故話の区切り方がめっちゃくちゃです（汗）

面目ない。

そんな出会い

呆えているわけでもなく、寂れているわけでもない、郊外の小さな集落。

そこより僅か離れた地点に、数人の男がたむろしていた。

涼しく、過ごしやすい季節だというのに、汗だくで座り込んでいる彼らの傍には、人間の大人一人余裕で入りそうな大樽が6つ。

何やらわけがありそうだ。

善行の足掛かりとなりそうな気配がする。

修一に目配せをすると、男らの方へ足を向けた。

「何事だ」

「あ？なんだアンタ」

「あー。スンマセン。ただ、どうしたのかなーって、心配になったもんで」

永く生命活動を続けてきたせいか、無感情な声と無機質な言葉のおかげか否か、早速警戒されてしまったらしい俺に代わり、修一が顔を覗かせる。

どうやら連れてくるという判断は正しかったようだ。

俺の方への警戒が僅かに緩め、修一を見る男達。

「変わった服だな。あんちゃん。貴族か何かかい？」

「え？あー…っと」

男らの問いに修一が言葉を詰まらせる。

そういえば修一は学生服のまま。

何か装備を与えてやればよかったかとは思うが、それも今更だ。

修練も兼ねてギルドで金を稼ぎ、買わせるとしよう。

アドバイスくらいはするが、勿論買うのも稼ぐのも修一自身だ。

「これはそこで拾った。遙か東にある島国の者だそうだ。貴族ではないが商家ではある」

「そ、そうそう！ちよいと外の珍品を買い集めようと思ってね」

口から出任せを言うのもこれで幾度目か。

どの勇者も大抵面倒事に巻き込まれる為、その都度俺の誤魔化しスキルが磨かれたものだ。

「商人だあ？なあんも持ってねえじゃねえか」

「え。あ、あー……いやあ……」

男の怪訝な視線に修一は困り顔で頭を掻き、ちらりとこちらを見る。前言撤回。連れてこなければよかった。

「荷は森でこいつに喰われた」

実はあの後回収しておいたスライムの死骸と、それからついでに喰われていた戦士だか、冒険者だかの溶けた装備を亜空間から取り出す。

特に重要な物でも無い為適当な位置から取り出したそれらは、俺の目の高さからガラガラと重力に従い地に落ちた。

「一応遺品なんだし、もつと丁重に扱うとかないわけ？」

修一がばやくのが聞こえた。

俺の縁者ではない為粗末に扱ってしまったが、そう言われればこれもどこかと縁のある者の形見。

何の感慨も持たない俺からすればただのゴミだが、縁者からすれば宝ともなる物だ。

「……ふむ。以後気を付けよう」

魔王「善イメージの為に」

「い、色々言いたいことがあるんだが、アンタ、これどっから出したんだ？」

茫然とした様子で人間が口を開く。

空間と空間を繋げる魔術は、人間の間では既に廃れている高等技術だ。

少なくともこんな片田舎で見る魔術ではない。

それ以前にこれは魔術ですらないのだが。

「先程目の前で見ただろう。亜空間だ」

「あ、亜空間でお前……」

驚くべきか、呆れるべきか選り損ねたような顔になった男。

腕に覚えのある魔族にとっては、使い勝手の良い魔法として重宝しているポピュラーな魔法の一つなんだがな。

「それより、何故このようなところで座り込んでいるのか、聞かせてもらおう」

「それよりってお前！自分がただだけ凄いことやってるかわかってんのか！？」

「……？自慢でもされたかったのか？」

「違うわ！」

その後も、たった二人でスライムを数十体も倒したことやら何やらと騒がれたが、軽く流して問いに対する答えを促すと、諦めたように溜息を吐かれた。
意味がわからん。

人間の疑念

男らの話はこうだ。

つい二月程前、ここに大きく育ったスライムが現れた。

スライムは森や森付近の獣、人間を食い荒らす。

村人はそれを恐れるも、ギルドへ討伐を依頼する金はなく、スライムが村へ寄り付かぬよう火を焚き続け、時折通る冒険者がそれを退治するのを祈っていた。

しかしスライムを倒す者が現れる前に、恐れていた事が起きる。
水が底を尽きたのだ。

この村は水源が乏しく、水を得るにはスライムのテリトリーを通り、その先の泉へ行かねばならない。

腕に覚えのある村の男らが生きるため、水場へ向かい、幾人も喰われたのだと言っ。

今日も命懸けで水を運んでいたが、その帰り、運悪くスライムと出会った。

必死に逃げたものの、水樽を載せた荷台は壊れ、子スライムに囲まれた挙げ句親が現れる。

もう駄目だと覚悟したその時、何かに反応したスライムらは男らをそのままに去って行ったそうだ。

そして状況も分からぬままに、10あった樽のうち、無事だった6を手分けして運び、力尽きて今に至る。

丁度男らが死に面したその時、修一が鼻血を出したのだろう。

「お手柄ではないか」

「な、なんか複雑だけどな……」

「何においても複雑な心持ちにしかならんのか」

「複雑な心持ちになる事しか起こらないんですう」

反抗期な修一は置いておいて、疲労しきっている男らと重量感を醸し出す大樽を見る。

知らぬ振りをして、男らに引き続き運べと言つのは酷だろう。

「丁度村へ向かっていたところだ。事のついでに運んでやろう」

その旨を男らに告げ、魔法で樽を5つ浮き上がらせる。

「修一、一つ持て」

「はっ！？何で！？」

修一が声を上げた。

樽の一つや2つ持ち上げる事に大差はないが、修一が己の筋力の具合について知る為にも、一つくらいは持たせておいた方がいいだろう。

水が詰まっているとはいえ、たかだか樽一つ運ぶだけだ。

さして負担にはなるまい。

「ち、ちょっと待て！樽を運んでくれるってのは願ってもない話だが、アンタ、今もさつきも、詠唱しないで魔術使わなかったか！？」

「魔術ではない。魔法だ」

「はっ！？」

男が目を見開いた。

意味が分からない、という顔だ。

「ま、待てよおい！魔法って事はまさかお前……！」

俺を指差し魚のように口を開閉させる男。

「む？まだ言っていないかったか。俺はお前達に魔王と呼ばれている魔族だ」

「魔族っ……！ま、魔王……！」

予想通りの反応はスルーし、樽を前にもたもたしている修一に声をかける。

「行くぞ修一。早く持て」

「そうやって何でもない事みたいに流すから、調子狂うんだよなあ……。てか、無理だろこれ……」

何かを悟ったような遠い目の修一がいた。
諦念の色を滲ませて樽に手を掛ける。

「よっ……ってうおっ！？軽っ！」

案の定力を入れすぎたらしい修一が尻餅をつく。

「他者の腕を潰す前に力の加減を覚えろ」

本人が知りたいと言うなら魔術を教えてやってもいいが、その前に日常生活での力加減を覚えさせなければ。
すっかりで他者を殺めたり、器物を破壊しかねんからな。

そうならば俺の目的の障害ともなる。

「アレ特有の肉体強化ってやつ？」

「そうだ」

尻餅をつき、腹と膝の上に樽を載せたままの修一に軽く返事をして先へ進む。

何度も行くぞと声はかけてあるから問題ないだろう。

「ま、待て！今アンタ、魔王って……！」

今度は酷く顔色の悪い男らに呼び止められた。
いい加減先へ行きたいのだが。

「次は何だ」

「本気で言ってるのか!？」

「無理に信じろとは言わん」

半信半疑だろうが笑い話だろうが、兎も角魔王が善行をする話が広まればいい。

人は己の中の真実を捨てられない生物だ。

その真実に、ほんの僅か亀裂が入れば上々。

その後は時をかけ、我らの常識を刷り込んでいけばいい。

「……」

男らの怪訝な視線が俺を差すのが分かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2916p/>

唯一絶対個体種俺

2010年12月15日21時31分発行